

燭台舎ネット新書

明治教育の呪縛

誤解させられてきたいきさつ

田中 萬年

SHOKUDAISHA

まえがき — ヒントは江戸時代にある —

東日本大震災の発生によりリーマン・ショックの問題がやや陰うすくなった。東日本大震災による学校教育の困難も生じているが、本書では教育の根本的問題に話の的を絞りたい。

そのリーマン・ショック以降、急に職業教育やキャリア教育が喧伝、推進された。中央教育審議会が今年1月31日に答申した「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」はその集大成である。このような対策が出ることはこれまでのわが国の教育の実態が普通教育偏重だったことを意味している。このことは、わが国に蔓延している「普通教育」への信奉を打開せずに職業教育が定着する訳はないといえる。

しかも、その「普通教育」は概念不明の言葉である。しかし、言葉は思想を表している。言葉が制度を造り、人々の思考を再生産する。そして、制度の実態が言葉の意味を変えることもある。変化するからといって言葉の定義をあやふやにすれば、制度が崩れ、思想が乱れることになる。「教育」についてはこの現象が生じているといえる。例えば、先の答申では大学での職業教育を重視する案が盛り込まれている。この案は、すべての大学を職

業教育大学にする案ではないので、結果的に研究を主とする大学とに大学を二分することになる。このことは高校段階における職業教育軽視観を大学段階にもたらしことになり、教育の混乱を拡大する恐れはあれ、教育の問題の解決には何もつながらないといえる。

ところで、言葉は歴史と文化を反映している。「普通教育」への傾倒もわが国の近代化以降の歴史と文化の反映である。真の職業教育普及のためにも普通教育の問題を説明する必要がある。そして、それは「教育」そのものへの問が必要となる。今日の教育をめぐる様々な問題は根源に明治教育、すなわち明治期に特殊日本的に成立した教育の呪縛が解かれていないために生じているといえる。つまり、信奉した明治教育に日本人は未だ疑いを持とうとしていないのである。

そのような下で、父母はどのような期待をもってわが子に教育を受けさせているのであろうか。その期待はもちろん国民一人ひとりで異なるであろう。その多様な願いを象徴的にまとめれば、「わが子が能力を得て、将来の幸せな生活が可能となること」だ、と思われる。フリーター、ニートになることを願っているはずがない。その能力を習得するために期待されている具体的な機会は学校教育であらう。その学校教育は政府・文部科学省が管轄し実施している。

問題は国民が期待する教育と、政府・文部科学省が実施・展開している教育との間には齟齬がないのか、という点につきる。この両者が一致していれば教育に対する疑問も批判も起きないことになる。しかし、現実はそのではない。

今日の教育の混乱を背景に、教育改革について出版されている書は百花繚乱のごとくである。しかし、多くの書においても教育の何が根本的な問題か明確でない。そのために、改革の展望も不明確になる。このことは教育の改革が簡単ではないことだけを明らかにしているといえる。そして、善意の国民の意見や願いが結果的に問題解決を難しくしている。

このような事態を捉えて教育改革は困難だとする論調もある。

しかし、なぜ教育の改革が困難なのかについて明らかにした書はない。ただ、高橋哲也や山崎正和が「教育」には統制的機能がある、と述べていることに課題がありそうである。

しかし、何故に統制的な「教育」を用いるようになったのかは述べていない。

また、広田照幸等は教育の問題を議論する根拠に誤解があるとしているが、「教育」そのものには疑問を呈していない。これでは広田のいう誤解も解決しない。

そこで、本書はこれまでに考えられなかった、全く新たな立場からわが国の教育の問題を解き明かそうとするものである。それは、「教育」の言葉そのものに問題が有るとする立場である。そして、同時にその教育を担ってきた文部省が国民の考えるような官庁として設立されたのではない、ということである。さらに、学校は成立当初は教育を実施する

所ではなかったのである。これらの誤解があるため、「普通教育」についても疑問が生じていないのである。文部省や学校が設立された当初の業務を今日の国民は知らず、また「教育」の概念を誤解したままに議論していることを本書では解明する。

結論をのべると、明治初期の文部省・学校の設立は「教育」のためではなく、「学問」の実施のためであった。教育を施す省であれば「教育省」、あるいは「教部省」であり、場所であれば「教校」であろう。設立の意図であった「学問」の実施とは異なった教育へその後に変質したことが、今日の教育問題の大きな根源になっているのである。

当時の「学問」は「勉学」としての学問であった。学問・勉学は学習者の欲求で行うのであり、その内容に区別は要らない。しかし、教育は実施者の意図で内容を区別し、被教育者を区分する。その一つが「普通教育」である。文部省、学校がどのような経過によって教育を実施する官庁、制度になったのか、つまり、文部省、学校は何故に変質したのか、ということの解明は今日の教育が混乱している根源を解明するためにも緊要と考える。

その謎を解く手がかりは江戸時代にあるようだ。そこで、江戸時代の庶民の学習機関である寺子屋はどのように捉えられていたかを見てみよう。歌川派の絵師花里（一寸子）が江戸末期の寺子屋の様子を「文学萬代の寶」と題して描いた浮世絵がある（カラー版を『教育と学校をめぐる三大誤解』に掲載している）。この絵は、「男女6歳にして席を同じう

せず」の諺のように男女別に2枚に描かれ、それぞれ助教らしき者がおり、男性の師匠の後ろには「史記」と「日本」が、女性の師匠の後ろには「生花大全」、「香道、茶道、哥」のいわゆる「読み・書き・算」の後に学ぶであろう教材が並べられている。その他、師匠の後ろの机の上に積んである教材らしき書物がある。これらは当時、寺子屋でも利用されていた「往来物」ではなからうか。第2章で詳述するが「往来物」には職業に関する内容も少なくなかった。寺子屋では単に基礎的な読み・書き・算の指導だけではなく、「史記」等の漢文の学習や職業に関しても受講者の必要に応じて施されていた。学習（学問）に区別は要らないのである。

さて、絵には「文学萬代の寶」の解説文が記されている（これも『教育と学校をめぐる三大誤解』に紹介している）。向井満によるこの現代語表記により紹介してみよう。

この解説では、寺子屋での「文学」がいわゆる学習であることがわかる。江戸時代の「文学」は学習の意味であったのである。最後は、「金銭財宝は尽朽る事有。文学筆道は末代不朽名を残す。かく尊き文学の師恩を夫程におもわぬも歎々敷親たる者子孫に能々教さとし、世の通用だけは教ゆべし。故に文武は国家を治る尊き重宝の種と云々。」としている。金銭は残らないが「文学」は末代まで残り、本人のためだけでなく国のためになり、当然ながら武術と対等であると考えられていた。「文武」の「文」とはこのような学習する「文

学」のことであったことが分かる。

「文学」の用語に学習の意味があったことについては中国における例もある。第5章に紹介するが、“Education in Japan”は中国では「文學興國策」と翻訳・紹介された。つまり、“Education”を「文学」としていたのである。

これらのように、「文学」の用語は今日的な学習や「学ぶ」に相当する言葉として利用されていたことが分かる。このような「文学」であれば、普通教育と職業教育とを区別する必要はなかった。「文学」が明治の近代化の過程でどのようにして「教育」になったのかを説明することが本書の課題である。換言すれば「明治教育」はどのようにして形成されたのかの解明である。そして今日、「普通教育」が誰にも疑われなくなった背景の解明である。それは、今後の人間形成のあり方を考える前提になるはずである。

なお、本書での約束事を記しておきたい。以下、言葉あるいは概念を表す場合は「」を付けて「教育」と記し、その実体あるいは営みについて表す場合はカッコを付けずにそのまま教育と記す。そして、そのあるべき姿についてはそれらと区別してカタカナで「キョウイク」と記すこととする。また、すでに通用している、例えば学校教育のような複合語についてはその実体を意味するものと解して、その用語のまま記すことにする。

本書の願いは、あるべき姿のキョウイクとは如何なる状態をいうのか、そしてそのよう

なあるべきキョウイクにふさわしい新たな言葉を国民の皆さんで創造して頂くことにあ
る。言葉は誰が創っても良いからである。その言葉には思想と理念が内包される。そして、
そのキョウイクを担う官庁に国民は何を期待し、何を要求すべきなのか。学校でなすべき
事は何なのか、等について検討される時の素材に本書がなることができれば幸いである。

二〇一一年五月

田中 萬年

（まえがき参考文献）

- ・高橋哲哉『教育と国家』、講談社現代新書、2004年。
- ・山崎正和『文明としての教育』、新潮新書、2007年。
- ・広田照幸・伊藤茂樹『教育問題はなぜまちがって語られるのか？』、日本図書センター、2010年。
- ・向井満表記『文学萬代の寶』、黒田清隆監修『新バネル日本史 近世編』、飛鳥、所収。
- ・中江克己『江戸の躰と子育て』、祥伝社新書、2007年。

明治教育の呪縛

——誤解させられてきたいきさつ——

目次

まえがき——ヒントは江戸時代にある……………

第一章 文部省の変質……………

1. 奈良時代の「文部省」は教育の官庁ではなかった
2. 「教部省」は使えなかった
3. 「学問」のために設立した文部省
4. 「文部」採用の意味
5. 「教育」の省に変質した文部省
6. 戦後改革では改称にいたらなかった

第二章 学校の変質……………

1. 「生長」のための試行的小学校
2. 「学問」のために設立した学校
3. 「学問」政策下の「立身出世」の鼓舞
4. 学校焼き討ち事件の拡大と鎮圧
5. 「教育」政策下の「立身出世」の鼓舞
6. 「夢」に破れた人への慰め
7. 学校は「教育」を受けるところではなかった

第三章 「明治教育」の生成……………

1. 孟子が創った「教育」は国王の「楽しみ」だった
2. 中国では「教育」は使われなかった
3. 日本での「教育」の使用
4. 人民への「教育」の浸透
5. 中国は「教育」を日本から逆移入した
6. 各種事辞典における「教育」の定義

7. 『広辞苑』の「教育」の定義は変化している

第四章 “Education” 訳の詐偽

1. 各種辞典における“Education”の定義
2. ウェブスターにおける“Education”の定義は発展している
3. “Education”の鍵概念は「開発」と「職業」である
4. イギリスでは労働者の学習から学校が発展した
5. “Education”親の欧米における実情
6. 徒弟制度による仕事の伝承が“Education”的だ
7. 日本人の「教育」好みと「訓練」嫌い

第五章 「教育」と“Education”の同定

1. 「教育」と“Education”との出会い
2. 中国では“Education”は「教育」ではなかった
3. 中国では「教育」は“Education”ではなかった
4. 福沢諭吉は「発育」であるべきと主張した

5. 「教育」と“Education”との同定

第六章 「普通教育」の創造

1. 「普通教育」の概念と妄信
2. 「日本国憲法」における「普通教育」の利用
3. 国際的規程に無い「普通教育」
4. 「普通教育」普及の背景と性格
5. 『理事功程』での初出と『米欧回覧実記』による普及
6. 始まりはフルベッキの“popular education”

あとがき——これからの人間形成のために——

図版出典